

谷口ゼミ活動報告

— 中世の鎌倉と建長寺 —

【日程】

2025年6月14日（土）

【場所】

神奈川県鎌倉市 建長寺・長寿寺・亀ヶ谷切通

【参加者】

3年生：小川埜々香・中村知優

4年生：伊藤翔太・河原幸清・菅原美咲・染川真帆

大学院生：安田健人

卒業生：仲程信志郎・森野裕成

【概要】

青山学院大学文学部史学科日本中世史（谷口ゼミ）では、定期的に学外授業として日本中世に関連する地域へ行き、フィールドワークを行っている。今回は建長寺派広福寺副住職の白川宗源様・長寿寺住職の浅見紹明様の御厚意・御案内により、神奈川県鎌倉市の建長寺・長寿寺・亀ヶ谷切通を見学させていただいた。谷口ゼミの3年生2名、4年生4名、大学院生1名、卒業生2名の計9名が参加し、中世の鎌倉と禅宗文化について理解を深めた。

※ 写真の撮影・掲載について、白川様より掲載の許可をいただいております。

【見学コース】

【1】建長寺（境内見学）→【2】長寿寺 →【3】亀ヶ谷切通 →【4】建長寺（得月楼）→【5】侍気分 → 懇親会 → 解散

【地図】鎌倉散策コース（国土地理院ウェブサイトより）



【1】建長寺

①総門

我々が最初に訪れた総門は建長寺の正面の入口に当たる。現存している総門は、1783年に京都の般舟三昧院に建立されたもので、1940年に建長寺へと移築されたものだ。「巨福山」の額は建長寺10世住持の渡来僧・一山一寧の筆と伝えられ「大きな福をもたらす寺」という意味とのこと。「巨」字の第3画目の下に、余分な「点」が書き加えられているが、これは、中国に存在する異体字に則ったものであるとの事だった。この点があることによって字に百貫の重みが増したということで「百貫点」とも呼ばれている。

②三門【写真 1-4】

総門を通り、しばらく直進すると荘厳な三門に辿り着いた。現在の三門は1775年、蘭溪道隆の500年忌に当たって再建されたとされる。楼上には釈迦如来・五百羅漢・十六羅漢が安置されており、それらの下を通ることで煩惱が浄化されると言われている。今回は建長寺のご厚意で特別に楼上に上がらせてもらい、実物を拝見させていただいた。上層には軒唐破風が設けられており、「建長興国禅寺」の額字は後深草天皇

の筆によるものとされているが定かではない。また、関東大震災の際にこの三門と法堂は倒壊を免れており、当時の建築技術の高さが伺える。



▲【写真1】 建長寺三門（全体）



▲【写真2】 建長寺三門の額字
「建長興国禅寺」の字は伝後深草院。



▲【写真3】 三門楼上からの眺め
建長寺が谷戸に囲まれていることが見てわかる。



▲【写真4】 建長寺三門（楼上）
釈迦如来・五百羅漢・十六羅漢が安置されている。

③柏槨【写真5】

荘厳な三門を抜けると、三門と仏殿の間に巨大な古木のある中庭が見えてくる。この木はヒノキ科の常緑針葉高木で、柏槨と呼ばれている。柏槨は東北南部から九州の海岸に分布しており、社寺や庭園によく植えられ、禅寺を象徴する樹木である。建長寺の柏槨は、開山蘭溪道隆が中国から苗木を持ち帰り、建長寺創建の際、自ら植樹したと伝わる。この柏槨の位置関係を知る手がかりとなるのが、元弘元年（1331）に作成された「建長寺指図」である。これは、鎌倉時代末の建長寺境内の伽藍配置を描いた貴重な史料である。それによると、指図が描かれた元弘元年の時点では、総門・三門・仏殿・法堂などの建物が直線状に並び、三門と仏殿の間に柏槨の木を確認できる。このことから、鎌倉時代末には既に柏槨が植樹されており、現在の位置関係にあったと考えられる。以後、建長寺を筆頭に、禅宗系寺院では柏槨を植樹する風習が広まったと伝わっている。



▲【写真5】中庭にある立派な柏槨

④鎌倉半僧坊【写真6】

柏槨を過ぎてから険しい道のを越えると、鎌倉半僧坊にたどり着く。境内の最奥の勝上嶽に位置しており、建長寺の鎮守である半僧坊大権現を祀るお堂がある。半僧坊大権現には天狗が仕えており、参道に天狗像が祀られている。明治23（1890）年に建長寺235世霄貫道師が夢の中でお告げを受け、静岡県奥山方広寺から勧請したとされている。鎌倉半僧坊にある玉垣には、品川や川崎といった地名が書かれており、海運に関わる人々からの信仰を集めたと考えられる。鎌倉半僧坊からは建長寺全景と相模湾が見ることができ、素晴らしい眺望である。



◀【写真6】鎌倉半僧坊
建長寺の鎮守「半僧坊大権現」
建長寺境内の最奥にある勝上嶽を登り終えたところに、祈祷所と展望台がある。展望台からは、鎌倉の街を見下ろし、相模湾を一望できる。

⑤法堂（鎌倉半蔵坊御祈祷）【写真7-8】

この日は鎌倉半蔵坊大祭の御祈祷が法堂で執り行われており、私たちも参加させていただくことになった。法堂では建長寺のシンボルである雲龍図に迎えられ、厳かな雰囲気の中でお経と巨大な太鼓の音が鳴り響いた。普段の生活では体験できない御祈祷の空気感は言葉にできないものがあり、独特の雰囲気を味わうことができた。また令和10年は建長寺を開山した蘭溪道隆の750年遠忌にあたり、さまざまな記念行事開催への準備を進めている。今現在改修工事中の仏殿も750年遠忌を迎える前年に工事が終了する予定である。



▲【写真7】法堂の内部



▲【写真8】祈祷前の様子

⑥方丈・庭園【写真9】

現存する庭園は、建長寺を開山した蘭溪道隆の作庭のものが、復元されているものである。「心字池」とも呼ばれており、この池は「心」の漢字の形になっている。禅宗寺院には建物の後ろに池があり、精神的な修行を促す場所として配置されたと考えられている。禅宗では、経典や言葉で教えを伝えるのではなく、以心伝心を重視している。



しかしどうにか教えを表現しようと、禅僧が文化を広めることが多い。京都天龍寺の作庭をした夢窓疎石は、建長寺で修行を行っている。方丈・庭園は、NHK総合テレビジョンの『ブラタモリ』の2024年2月10日放送でも取り上げられている。

◀【写真9】方丈の「心字池」
池の形が「心」の字に見えるという。

⑦梵鐘【写真 10-11】

建長7（1255）年に鑄造されたこの鐘は、建長寺創建当時から残る貴重なものである。明治28（1895）年9月、夏目漱石は「鐘つけば銀杏ちるなり建長寺」という俳句を詠んだ。これは、建長寺の鐘の音を聞くと、銀杏の葉が散る様子が目に浮かぶ、という秋の風景を表現したものである。この句よりも親友の正岡子規がこの句を参考に作ったという、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の方が広く知られているかもしれない。しかし、建長寺を詠んだこの句もぜひ心に留めていただきたい。また、鎌倉は夏目漱石の他にも多くの文豪にゆかりのある地でもある。ここで建長寺の見学を一度終え、次の目的地である長寿寺に向かった。



◀【写真 10】 建長寺の梵鐘
国宝指定。鑄造は関東鑄物師の筆頭、
物部重光によるもの。



◀【写真 11】 建長寺の紫陽花
建長寺から長寿寺へ向かう道中には、
季節を感じる紫陽花も見られた。

【2】長寿寺

⑧本堂

建長寺から北鎌倉駅へ向かって歩いていくと、左手に「足利尊氏公ゆかりの寺」と書かれた看板と階段が見えてくる。ここ長寿寺は、臨済宗建長寺塔頭寺院である。足利尊氏が邸跡に建武3（1336）年創建し、諸山第一位の列に定めた。靴を脱いで畳敷きの本堂に上がると、お焼香の香りが広がっていた。誰一人言葉発しない静寂の中、三列に並び参拝の順番を待っていたところ、右側に足利尊氏像があることに気づく。この像内には元禄二年再建の由起文がある。左側の像は、開山古先印元禅師の像であり、これは室町期の彫刻像で仏教美術史上に於いても貴重なものだと言われている。

⑨書院【写真 12-13】

長寿寺の玄関を上がって右側へ行くと、日のあまり入らない部屋がある。ここには禅の精神を反映した掛け軸や紫陽花が配されていた。セオリーに囚われない独特の崩し字は言葉では伝えることができない禅の心を表現している。「寿山萬丈高」は、万丈山のように寿命が長いことを指すが、ここでの寿山は長寿寺の山の意味もかけられている。「大道透長安」は、長安は悟りを意味し、すべてのことが悟りに通じているという意味である。言葉を介してでは伝わらない悟りの精神を私たちも感じることができた。



▲【写真 12】掛軸「大道透長安」



▲【写真 13】掛軸「寿山萬丈高」

⑩小方丈【写真 14】

さらに奥に進むと、小方丈へとつながる。ここでは、緋毛氈が敷かれ、ガラス戸の目の前にある座布団や後方に置かれた椅子に座って情緒あふれる庭園を眺めることができる。しばらくの間、参加者はこの庭園に向かって静座し、音を排除した禅の空間を肌で感じる事ができた。



▲【写真 14】長寿寺の小方丈

静座して、庭園を眺めながら禅の世界を体感する一同。

⑪観音堂

雨が降り始めたため、足早に観音堂を通り過ぎながらも、足利尊氏墓に向かった。観音堂は、奈良県の古刹忍辱山円成寺より室町時代に建立された多宝塔を大正時代に改造移築したものである。観音堂の中には、優雅な姿の聖観音立像の姿があった。

⑫足利尊氏墓【写真 15】

観音堂の右手にある階段を登ると、やぐらという山を削って穴を開けた空間があり、足利尊氏の墓である五輪塔がある。この場所には、遺髪のみが埋められていると伝えられている。中世以降、五輪塔の上から3段目の形状が扇型のように広がっていく傾向があるとされ、この五輪塔は垂直に近く中世期のものと言える。よく見ると、欠けている部分があり、これは南朝を正統とする皇国史観の中、足利尊氏は逆賊と評価されていて、訪れた子どもに石を投げられたからだと言う。



▲【写真 15】 足利尊氏の墓

中世期に作られた五輪塔。欠けているのがわかる。

【3】 亀ヶ谷切通【写真 16-17】

県道 21 号線から長寿寺に向かってすぐ左脇にある道が、亀ヶ谷切通である。入り口付近は原付に跨る地元の方や、脇の紫陽花を眺める人々で賑わっていたが、200 メートルほど登っていくと両側が崖と木々に囲まれた静かで涼やかな空間が広がっていた。この切通を抜けることで隣の谷戸への迅速な移動が可能であり、交通機能としての切通の役割を確認することができた。さらに南下すると、右手に延寿堂地蔵尊がある。ここは建長寺の僧たちが体を悪くして手遅れになった際に運ばれる場所である。苦しんで死に行く時は静かに過ごしてほしい、という意味である。境界としての切通には、生と死という境界の意味もあることがわかった。



▲【写真 15】 亀ヶ谷切通

浄光明寺・英勝寺方面につながる。
右手側に「延寿堂地蔵尊」がある。



▲【写真 17】 切通を談笑して歩く様子

【4】 建長寺

⑬得月楼【写真 18-20】

その後再び建長寺へ向かい、得月楼を訪れた。得月楼とは、客殿として平成 15 年に復興された二階建ての建物で、「月の景趣を十分に眺める」という意味を持つ。そこでは現在修復工事のために入ることができない仏殿から蘭溪道隆像などが移動されており、さまざまな像を間近で見ることができた。そこでは蘭溪道隆像だけでなく、道教の神である伽藍神像が置かれていた。建長寺建立当時、日本にはまだ伽藍神を祀る文化はなく、日本国内を見てもこれらの像がある寺院は稀である。建長寺にある伽藍神

像は蘭溪道隆が制作を命じたという説があり、禪が日本に新たな文化を伝えた一例として挙げられる。



▲【写真 8】得月楼

仏殿改修中のため、蘭溪道隆像をはじめ多くの像が得月楼に安置されていた。



▲【写真 19】蘭溪道隆像



▲【写真 20】伽藍神像を観察

【4】侍気分【写真 21】

ひととおりの見学が終わって時計を見るとまだ 14 時半を過ぎた頃であり、夕食までは 1 時間以上も時間があつた。そこで私たちは、巨福呂坂の切通しを抜けて鶴岡八幡宮の中を通り、若宮大路の侍気分という歴史グッズを取り扱っているお店でしばらく涼むことにした。青山学院大学経済学部出身の小西竜介様が経営する、開店して 9 年にもなる老舗である。店舗前の床の一部はガラス張りになっており、移設した北条泰時邸跡を眺めることができる。参加者の数名が織田信長の T-シャツや鎌倉幕府滅亡や直義の経歴をあらわしたトートバックを購入し、しばらくの歓談ののち、店を後にして私たちは夕食へ向かった。食事は白川様を囲み全員の交流を深め、今回の旅は終了した。



▲【写真 21】「侍気分」店主の小西様と記念写真を撮影

小西様考案の歴史グッズを購入。青山学院の校友同士、会話が弾んだ。

【散策を終えての感想】

安田（大学院生）：

研究で古記録や語録など禅宗の史料を見ることがあるのですが、半僧坊大祭に参加して、それらがどのような場面を表したもののかなど、理解するにあたり少しイメージができました。また建長寺、長寿寺を巡見し、禅宗とは何か、について触れ、考える機会にもなりました。全体を通して現地調査の意義を改めて感じた1日でした。ご案内くださった白川宗源さん、浅見紹明さん、谷口先生、そして同行した皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

伊藤（4年生）：

私は鎌倉の街の美しさ、歴史的な価値に魅了され、以前から何度も鎌倉に訪れたことがありました。建長寺の方にも、以前お伺いさせて頂きその魅力に触れさせて頂きました。しかし今回は、白川様の解説をお聞きしながら巡ることができ、建長寺の魅力を隅々まで感じる事ができました。また、大変なご厚意を賜り、普段は入ることのできない建長寺三門の上へと登らせて頂いたことは、私にとっては大きな感動でした。この度、大変貴重なお時間を頂きました白川様や建長寺の皆様、引率頂きました谷口先生、そして今回の学外授業に関わって下さった全ての方々に厚く御礼申し上げます。

河原（4年生）：

鎌倉といえば鶴岡八幡宮や高德院の大仏、小町通りを想像する人が多いと思います。今回訪れた建長寺や長寿寺を想像する人はあまり多くないのではないのでしょうか。しかし、一度訪れる価値は十分にあります。建造物や景観に息をのむだけでなく、静かな場所に位置しているため、疲れた心も安らかになります。今回の旅で歴史を学ぶことに加え、自分自身についても考えることができました。美味しいものを食べ、大仏に圧巻される旅も良いですが、建長寺・長寿寺にて自分自身と向き合う旅も面白いのではないのでしょうか。最後に今回の旅に関わった皆様に心より御礼申し上げます。

染川（4年生）：

建長寺へは初めて訪れましたが、建物や山の上からの景色に圧巻されました。また、鎌倉の谷戸の地形は史料上で想像することは難しく、実際に自分の足で歩くことで、その土地を知る事ができました。長寿寺では、様々な掛け軸を拝見することができました。禅宗の教えを象徴する掛け軸を鑑賞することで、自分の内面と向き合う

ことができました。特に、「大道透長安」の掛け軸が印象に残っています。「見て感じる」ことの意義を実感しました。今回の研修では、とても貴重な時間を過ごさせていただきました。今回の研修に関わってくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

菅原（4年生）：

私が前回鎌倉を訪れたのは中学の校外学習の時でした。歴史に本格的な興味を持つてから初めての鎌倉だったのですが、とても興味深く、勉強になることが数多くありました。私が最も印象に残ったことは建長寺の法堂です。初めて御祈禱に参加させていただきましたが、御祈禱が始まった途端に空気が変わり、太鼓の重厚な響きで身が引き締まる思いがしました。雲龍図も非常に迫力があり、この経験を通して自分を見つめ直すことができましたと思います。今回の旅では「ディープな鎌倉旅」ということで普段ではできないことを経験し、歴史を学ぶ人間として多くのことを学びました。今回ガイドをしてくださった白川様をはじめ、多くの方々に感謝を伝えたいと思います。ありがとうございました。

小川（3年生）：

鎌倉には何度か訪れたことがありますが、普段の旅では味わえない非常に貴重な経験ができた1日となりました。白川様から歴史や説話についてお話を伺いながら各所を回ることで、より深く鎌倉について学ぶことができました。論文や書籍を読むだけでは理解しきれない御祈禱の空間や、「言葉でなく心で通じる」という禅の精神を、実際に体感することができました。また、白川様、谷口准教授、4年生、院生、OBの方々と交流することができ、歴史学や卒業論文に対する姿勢に刺激を受けました。今回の学外授業に携わってくださったすべての皆様に感謝申し上げます。

中村（3年生）：

今回の鎌倉学外学習では普段関わることの少ない縦の繋がりを深めることができました。また個人での見学ではできない貴重な経験もたくさん積むことができ、非常に価値のある旅でした。鎌倉の端に位置する建長寺や長寿寺、切通しを巡ることで、その境界性を認識することができ、寺院の案内では、禅の心を理解するための禅文化を味わい、その心に触れることができました。最後に、今回の旅に関わってくださった皆様に心より御礼申し上げます。

仲程（卒業生）：

大学を卒業してから二ヶ月間、慌ただしく社会人生活を送る中で忘れかけていた“学び”の面白さを思い出させてくれる1日だったように思います。ただ現地を見て学ぶだけではなく、長寿寺では実際にお焼香をあげたり、半僧坊大祭のご祈祷も見学させていただいたり、文化の一端に触れることができました。今回のフィールドワーク先を案内していただいた広福寺副住職の白川宗源さんは、谷口先生と旧知の仲とのこと。今回のような貴重な機会に巡りあうためには、人と人との繋がりを大切にしておくことが何よりも大切だと思いました。改めて、ご案内、ご同行いただいた全ての方に深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

森野（卒業生）：

今回の学外授業は学生としてではなく、卒業生として参加させていただきました。権門的勢力間の関係性は中世日本の社会を捉える上で重要な視点であると思います。特に、寺社の影響力は大きいと感じていましたが、宗教的世界観のイメージが掴めずにはいました。今回、白川様のご案内のもと、建長寺・長寿寺を見学し、実際に祈祷の場に立ち会うことができ、禅宗の教えを心で感じる貴重な機会となりました。また、鎌倉の中心と外縁の境界に位置する建長寺・長寿寺・亀ヶ谷切通を歩きながら、中世人が見た世界を追体験することができたように感じています。歴史的な事象が生起した空間《場》に立つこと。文献史料だけではわからない空間的構造の中に身を置き、心で感じること。これがフィールドワークの意義であり、面白さであると思います。鎌倉を歩きながら、学ぶことの楽しさを噛み締め、学生に戻ったような気分になりました。やはり、歴史は面白いなど。同時に、何歳になっても学ぶ姿勢を絶やしたくはないとも思いました。学部生・大学院生・卒業生と世代の垣根を超えた交流が今後とも続いていくことを期待しています。最後に、ご案内いただいた白川宗源様、浅見紹明様、谷口先生、同行いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

【集合写真】

① 建長寺三門を背景に記念撮影



② 長寿寺前にて記念撮影



③ 建長寺入口前で記念撮影



広福寺副住職 白川宗源様
長寿寺住職 浅見紹明様

この度は、貴重な機会をいただきありがとうございました。
谷口ゼミ在學生・卒業生一同、心より御礼申し上げます。

青山学院大学
文学部史学科日本中世史（谷口ゼミ）
在學生・卒業生 一同